「教師の立場と信徒への警告」Ⅰコリント 4:1-13

2025.7.13　礼拝説教

序論）

教会には教える者と教えられる者がいます。教師と信徒、牧師と信徒、そういった立場の違いがあって、どこかこの二者の間では一線引かれているところがあります。

もちろん、イギリス発祥のブレザレン・兄弟団のようなグループは、牧師と信徒という立場の違いはなく、すべての人がみことばを語り、礼拝を導くことができるのだ。という考えを持っていたり、内村鑑三の無教会主義のように、そもそも組織としての教会や教職者制度というものは不要なもので、それらは神様からのものではなく、人がつくったものだ。と考える人たちもいます。

しかし、多くの教会、教団においては教職と信徒が分けられ、その立場には違いがあるとしています。事実、私達が所属している日本同盟基督教団においても、洗礼や聖餐式を執行できるのは、教団が認めた正教師のみであり、信徒はできないとしています。

では、本当に教師と信徒の関係は、一線を引くものであり、教師は特別な存在なのでしょうか。今日は、教会は教師をどのように理解し、どのようにするべきなのかを御言葉から理解したいと思います。

コリント教会の問題）

まずは、コリント教会の問題について簡単に確認してみましょう。

コリント教会が陥っていた問題の一つである分裂・分派の問題は、アポロやパウロといった教師、なかでも使徒と呼ばれていた人たちは特別な人たちであり、どの教師に従うかによって、自分たちの立場が変わるという誤解から始まっていました。

コリント教会の人たちはある教師を尊重し、他の教師を見下すことによって、その教師に従っている自分たちのほうが優れており、より多くの知識を持つものだと驕り高ぶっていたのです。

しかし、そんなコリント教会の人々に対して、パウロは３章で、パウロやアポロは【主】に用いられた奉仕者であり、問題はそのパウロたちが教会に据えたキリストという土台の上に、人々がどのような【主】の宮を建て上げるかだ。と述べていました。パウロたちは、自分たちのことを、教会を支配する指導者とは思っていなかったのです。むしろ、パウロは、教会は自分たちのことを自由に利用できる所有者であり、彼らは【主】のためにパウロたちや、その他のすべてのものを【主】の

ために用いるべきだ。と語っていました。

１） 使徒たちの立場

パウロは今日の箇所で改めて、自分たちの立場を説明しています。１節、２節を読みましょう。

4:1 人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。
4:2 その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。

教会は、パウロたち使徒、まぁ、現代に合わせて教師と言い換えてもいいと思いますけども、【主】の教えを伝える人たちを「キリストのしもべ」であり、「神の奥義の管理者」と考えるべきだとパウロはいいます。

ここでいう「しもべ」とは奴隷のことで、具体的にいえばガレー船のオールで漕ぐ奴隷のことを指します。**ガレー船というのはこの絵のような**人力の船で、一層には指揮官・見張り人・兵士がいて、二層には、その人達の船室や倉庫がありました。そして、最下層である３層目に大きなオールを複数人で漕いで船を動かす奴隷がいたのです。そして、その奴隷はドラムの音に合わせてその指示通り漕ぐことが求められていました。パウロたちはその奴隷のように【主】に言われるままに神の奥義を伝える下僕としての管理人だと自分たちのことを表現しています。

パウロにとって彼らに与えられた役割は、いかに上手に教会組織を支配するかではなく、神様に対して忠実に、神様のみ心のままにその奥義を伝えることだったのです。だから、パウロにとって人からどのように評価され、どのように扱われるかは、関係なかったのです。

みなさん、教会の教師は牧師と言われますが、その第一の働きは教会組織を支配することではなく、【主】のみこころのままに、その奥義であるみことばを伝えることなのです。もちろん、【主】に委ねられた魂を愛し、導く責任が教師には与えられていますが、教師に求められる忠実さは、人々に喜ばれるための忠実さではなく、【主】に対する忠実さです。

コリント教会の人たちは、どうもそのへんを勘違いして、時にはパウロを批判したり、自分たちの意向に沿わないと、パウロたちのことを裁いたようでした。

２） 信徒への警告

①さばいてはいけない
　だからこそ、パウロはそんなコリント教会の人たちに対して３節のように言っています。

4:3 しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。

　パウロは、コリント教会の人たちのことを愛していました。その証拠に第二の手紙の２章４節で彼はこのように言っています。

Ⅱコリント２：４
2:4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらにあなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を、あなたがたに知ってもらうためでした。

　パウロは、コリントの人たちのために涙を流してこの手紙を書くほど、彼らのことを愛しており、その愛を知ってほしいと思っていました。
　だから、彼はコリント教会の人たちに関心がないゆえに、彼らにさばかれたり、人間の裁判所につれていかれたりしたとしても、気にしなかったのではありません。
　パウロが人の批判や裁きを気にしなかった理由は、本当のさばき主は【主】である。ということを知っていたからです。だから、彼は４節で「私をさばく方は主です」と述べています。

4:4 私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。

　みなさん、これは自分で言うのも恐ろしいことですが、牧師である私は多くの間違いをします。そして、その間違いに対して、みなさんは怒りや苛立ちを覚えることもあるかもしれません。でも、その過ちを誰よりも正しくさばく方がいます。それが【主】です。
　パウロは３節で（**３節表示**）「**人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです**」と言っていますが、原文は「人の日にさばかれることは、非常に小

さいこと」となっています。「人の日」というのはこの地上の歩みですね。では、それに対比する「【主】の日」とはいつのことですか？　キリストがこられてすべてのことを裁かれる日のことです。【主】は必ず世の終わりにすべてのことを正しく裁かれます。だから、人間がどのように評価し、判断し、さばいたとしても、その【主】のさばきに比べれば大したことがないのです。

なぜならば、人がどんなに自分の正しさや人の過ちを主張したとしても、それで神様の裁きが変わることがないからです。だから、パウロは（**４節表示**）自分としては、少しもやましいことがないけども、それで義と認められるわけではない。と述べています。

みなさん、この神様のさばきを正しく理解したとき、人はどのようにふるまうべきでしょうか。そう、パウロのように人の評価で一喜一憂する必要もないし、何よりも、私達自身が先走った裁きをする必要がないのです。だから、パウロはいいます。５節

4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごとも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。

【主】は、どんなに私達が上手に隠していることも、すべて明らかにしてさばかれます。そして、その隠れていることが罪ではなく、正しいことであったならば、例え人に正しく評価されなかったとしても、【主】がそれを正しいと認めてくださり、【主】の日に、正しい称賛が与えられることになるのです。

だから、パウロは人びとの目や、さばきを気にしていなかったのです。

みなさん、私達は先走った裁きをやめるべきです。さばきは【主】に委ね。ただただ、【主】に忠実に歩むこと、それが私達に求められていることなのです。

この忠実さは、【主】が聖書を通して明確に教えてくださっていることに対する忠実さでもあります。６節を読みましょう。

4:6 兄弟たち。私はあなたがたのために、私自身とアポロに当てはめて、以上のことを述べてきました。それは、私たちの例から、「書かれていることを越えない」ことをあなたがたが学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して思い上がることのないようにするためです。

コリントの人たちは聖書に従ってパウロやアポロたちを批判していたのでしょうか？　恐らくそうではないでしょう。彼らが、彼ら自身が身につけていた考えや価値観に従って、勝手にパウロやアポロのことを批判し、さばいていたのです。
教会で分裂、分派を起こすということはそのようなことなのです。
そこには思い上がりがあります。

②思い上がってはいけない
だから、パウロは７節のように述べています。

4:7 いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、人からもらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。

みなさん、人が人をさばいたり、見下したりするときにその人の心の中にあるのは、ほかの人より自分の方が優れているという思い上がりです。
でも、それは大きな間違いであるとパウロは主張しています。なぜならば、誰かに何かを与えられることなく、自己完結している人はこの世にはいないからです。
みなさん、私達は必ず誰かに支えられて生きています。子どもや親に支えられているし、親も周りの人たちや、会社、農家の人たち、国や多くの人たちに支えられて生きています。そして、何よりも、すべての人は神様の恵みによって生かされています。
イエス様は言われました。

マタイ 5:44-45
5:44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。
5:45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです

【主】は悪人にも善人にも、太陽と雨の恵みを与え、人びとが生きるようにしてくださっています。そうであるのならば、その【主】の恵みに生かされ、ましてやキリストの贖いという、特別な恵みが与えられているキリスト者が、自分を他の人

よりも優れていると思い上がって、他の人を批判したり、裁くようなことをしてはいけません。

　みなさん、みなさんはこのような高ぶりを持っていないでしょうか。私達は恵みによって生かされている存在です。誰も【主】なしにいきていません。
　みなさん、想像してください。もし皆さんが誰かからの一方的な支援によって生かされているのだとしたら、高慢に振る舞うことができますか？　世の中には、親に養われているにもかかわらず、その支えてくれる親に対して傲慢に振る舞ったりする人がいるようですが、それは自分の現状を認識していない人であって、正しい振る舞いではありません。誰かに支えられているのならば、自分は支えられなければ生きていけない存在として、謙遜にへりくだって歩むべきなのです。
　それにも関わらず、【主】に生かされ、恵みによって救われている事実を忘れ、高慢に人を見下したり、評価したり、さばいたりするのならば、それは正しい知恵のない人の行動といえるでしょう。
　だから、私達は、自分を他の人よりも優れた者だと思い上がって、他の人を批判したり、裁いたりするのではなく、むしろ、他の人を自分よりも優れた人として尊敬するべきなのではないでしょうか。ピリピ２章３節にはこうあります。

2:3 何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。

　みなさん、私達は他の人に対して、どのように振る舞っているでしょうか。間違いを見つけた人を、自分よりも下の人としてみているでしょうか？それとも、へりくだって、他の人を自分よりも優れた人とみているでしょうか。
　私達は、どんなに自分が優れていると思えたとしても、このへりくだりをしていくことが大切なのです。

３）　使徒と信徒の現状

　しかし、コリント教会の人たちの現状と、彼らが自分たちの派閥の頭として仰いでいたパウロやアポロたちの現状は違っていました。

①信徒の現状

８節にはコリント教会の人たちの現状が書かれています。

4:8 あなたがたは、もう満ち足りています。すでに豊かになっています。私たち抜きで王様になっています。いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったのです。そうすれば、私たちもあなたがたとともに、王様になれたでしょうに。

彼らは、【主】の日の前の時代に生きているのに、もうすべてを持っているかのように満ち足りた歩みをしていました。パウロは「私たち抜きで王様になっています」と言っています。これは実は、非常に皮肉的な表現です。

なぜならば、コリント教会の人たちは王様のように振る舞っていたのに、彼らがリーダーとして歩んでいたパウロたちは、その人たちとはまるで違う生き方をしていて、とても、同じ【主】を信じる一つの群れとは言えない状態だったからです。

しかも、コリント教会の人たちは王様のように振る舞っていたけども、実際に王様のようにすべてのものを持っているわけではなかった。８節後半の「いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったのです。そうすれば、私たちもあなたがたとともに、王様になれたでしょうに」というのも非常に皮肉的な表現ですね。

これは、本当に王様のように何でも持っているようだったならば、コリント教会の人たちがパウロたちの状況を放って置くわけがない。ということを暗に主張しているのです。

つまり、どうゆうことですか、彼らはパウロたちのことをリーダー、リーダーと仰いでいながら、実際には何も助けも、支えもしていなかったのです。

コリント教会とパウロたち教師の間には、明確な格差がありました。しかも、それは教師が上で、信徒が下という格差ではなく、信徒側が王様で、パウロたちが奴隷というような格差です。

②パウロたちの現状

この時のパウロたちの状態はどのようだったかというと９節にこう書かれています。

4:9 私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。

「死罪に決まった者のように」「見せ物になりました」というのは、ローマの闘技場で、獣と戦う死刑囚のようにパウロたちが扱われたことを指しています。

実際、パウロはエペソで獣と戦わされました。この手紙の１５章３０節には「エ

ペソで獣と戦った」と書いています。　つづけて１０節を読みましょう。

4:10 私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。私たちは弱いのですが、あなたがたは強いのです。あなたがたは尊ばれていますが、私たちは卑しめられています。

　ここに明確にコリント教会の人たちとパウロたちの対比が書かれていますね。コリント教会の人たちは、賢者、強者、尊ばれる者として振る舞い。パウロたちは愚か者、弱者、卑しい人として扱われていました。
　教師と信徒の関係は、人間的に考えれば教師が教える側で信徒が教わる側のハズなのに、実際は逆だったのです。これはコリント教会の人たちと、パウロたちが一つになっていなかったことを意味しています。

この状況の中で、パウロたちが継続的にしていたことはなんでしょうか？　１１-１３節を読みましょう。

4:11 今この時に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、ひどい扱いを受け、住む所もなく、
4:12 労苦して自分の手で働いています。ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、
4:13 中傷されては、優しいことばをかけています。私たちはこの世の屑、あらゆるものの、かすになりました。今もそうです。

　パウロたちは、飢え、渇き、着る物もなく、ひどい扱いを受け、住む所もなく、労苦して自分の手で働いていました。私は幸いに、みなさんに支えられて生きていますが、日本の多くの教会の牧師の中には、経済的に厳しい状況の中でバイトしながら、必死に頑張っておられる先生方が多く居ます。
　でも、彼らはただ苦しんで終わりではありませんでした。「**ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、中傷されては、優しいことばをかけて**」いたのです。多くの苦しみを背負いながらも、祝福と忍耐、励ましをし続けていったのです。
　室蘭にいる藤山先生が、わざわざ振内チャペルに集い、共に礼拝をし、苦しみの中にいる兄弟姉妹を励ましておられるのも、まさにこの御言葉通りの歩みをされているのだと思います。

私は、恥ずかしながら全然、そのように出来ていない者です。
でも、多くの先生方が、パウロが１３節で「この世の屑、あらゆるものの、かすになりました」と言っているように、この世の人たちから見下され、ときには同じ教会の信徒からも貶されて、それでも、神の奥義の管理者として、忠実にみことばを伝え続けておられるのです。

結論）
みなさん、それでは最初の問いに戻りましょう。
教師と信徒、あるいは牧師と信徒はどのような関係であるべきでしょうか？
この２つの間に線を引いて、別々に歩むべきでしょうか？

私は、今日の箇所を通して、本当に自分の至らなさを思わされます。パウロたちのように、藤山先生のように、多くの苦しみを背負われながら歯を噛み締めて宣教されている先生方のように、私は出来ていません。
でも、このパウロたちが示す生き方に習うべきなのが自分のあり方であることを示されました。

では、みなさんはいかがでしょうか。パウロとコリント教会のような関係でいるべきでしょうか。それとも、キリストという土台の上に建てられた【主】の宮として、一つになって歩むべきでしょうか。

今日の箇所から明確に教えられるのは、私達は【主】のしもべであり、誰よりも【主】に忠実に歩むべきであるということ、そして、裁きは【主】のものであり、【主】は必ず【主】の日に裁くお方であるのだから、自分たちは先走った裁きをしたり、人を勝手に評価したりするのではなく、謙遜にへりくだって歩むべきであるということです。

みなさんは、心の中で誰かをさばいたり、見下したりしていませんか？
自分で何もかもできる人のように自分を特別に扱うのではなく、誰かによって支えられ、何よりも、【主】に支えられ、赦されて生きている者として、【主】の前にへりくだり、【主】に救われた教会として、一つになって歩んでいきましょう。
私達は誰かを見下すより、例え見下されたり、ののしられたりしても、忍耐し、祝福し、人を励ます者になりたいと思います。